

氏名（本籍）	劉 劍（中華人民共和国）
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博甲第 6666 号
学位授与年月日	平成 25 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代日本語の自動詞文と他動詞文 —事象構造の分析による再整理—
主査	筑波大学 教授 博士（言語学） 矢澤 真人
副査	筑波大学 教授 博士（言語学） 大倉 浩
副査	筑波大学 准教授 博士（言語学） 那須 昭夫
副査	筑波大学 准教授 橋本 修
副査	筑波大学 准教授 宮腰 幸一

論 文 の 要 旨

本論文は、現代日本語動詞の自動詞文と他動詞文について、事象構造の観点から分析し、自動詞文・他動詞文のより整合性のある分類を提示したものである。

本論文は、9章からなる。第一章では、従来の研究の問題点を指摘し、本論文の方法と目的を示す。本論文では、主として形態から接近する自他対応の捉え方では自動詞と他動詞との意味的關係のメカニズムを明確に提示できないこと、主として意味から接近する自他交替の捉え方ではメカニズムは提示しても日本語動詞の実態と矛盾することがあることを具体的な事例を挙げて批判する。そして、この解決には、意味の側から考察して、日本語動詞の実態とのずれを解消できるような、自他のメカニズムの再構築が必要であることを示す。

第二章では、自他対応・自他交替それぞれの先行研究について、批判的な検討を行い、問題点をより明確にする。

第三章から第六章は、主として他動詞文の検討を進める。第三章においては、Croft や Goldberg, Baker, Levin & Rappaport, 田川などの見解をもとに、causal chain の観点から、自動詞が表す事象と他動詞が表す事象との間に[cause]を認める判断基準として、「力の伝達・移動が物理的に観察されること」と「力を受けるものに生じる変化は、自立 (internally caused) という解釈を持つこと」という二点を提案する。この基準に則って、コーパス調査によって得た用例について、[cause]の關係にあるかを判定し、[+cause]の關係にある他動詞文のほかに、「他動詞の下位事象は cause の關係で結びつく」という Croft の主張に反する、「夜を明かす」のような [-cause]の關係にある他動詞文が見られることを指摘する。そして、日本語の他動詞文を、事象構造と[cause]の關係によって、事象をただ一つ表す[+単一事象]の「太郎が花子を待つ」タイプ、二つの事象を表してそれが[cause]の關係にある[+単一事象][+cause]の「太郎が窓ガラスを割る」タイプ、二つ以上の事象を表しながらも[cause]の關係をなさない[-単一事象][-cause]タイプにわけ、最後のタイプは、さらにいくつ

かに分けられることを示す。

第四章と第五章では、前章で示した[-cause]の関係にある他動詞文について、事象構造の観点から分析を進める。従来、他動詞文の周辺的な事象ないしは例外として扱われてきた、「太郎は（床屋で）髪を切った」のような介在性の他動詞文や「私たちは空襲で家財道具をみんな焼いた」のような状態変化主体の他動詞文について、前者は英語の「have」構文と類似すること、後者は「私たち」と「家財道具がみんな焼ける」という事象との間に「失う」という関係があることを示し、それぞれ[cause]に替わるものとして、[have]・[lose]という関係を設定することを提案する。

第六章では、第四章・第五章で示した他動詞文について、素性分析を試み、統一的な説明を試みる。この過程で、介在性の他動詞文と状態変化主体の他動詞文は、＜意志性＞＜働きかけ性＞などの素性において異なるが、事象構造の観点から見ると、「Initiator と対象の変化」という一般的な他動詞文の表す単純事象に主体とその単純事象との関係が重ねられた構造である点が共通すること、さらに、下位事象の Initiator と対象の変化との関わりはともに[+cause]である点も共通することを示し、違いは主体と単純事象との関わりの方質であるとして、この差異を[have]と[lose]で表す根拠を示す。

第七章では、自動詞文について論じる。従来の規定では、自動詞文は、行為か、他動詞文と[+cause]の関係になすような（自立的な）変化を表すのであり、ともに、単一の事象を表すと想定されているが、日本語では「木が植わっている」のように、外在的な動作主の行為が前提となった変化を表す「一単一事象」と見なすべき自動詞文のタイプが存在することを指摘する。この「一単一事象」の自動詞文は、アスペクト的に行為の完結点に生じた結果を表し、「点」的に捉えられるため持続性を持たないという特徴を持ち、事象構造と語彙概念構造において、他動詞と[cause] の関係をなさないと解釈する。

第八章では、テイル形に焦点を当ててコーパス調査を行い、「落ちる」や「倒れる」など、自立的な「+単一事象」自動詞は、タ形をよく取り、テイル形はあまり取らないのに対し、「建つ」や「植わる」など「-単一事象」自動詞文は、テイル形を取る傾向を示すこと、「+単一事象」自動詞はテイル形を取るとプロセス副詞と共起できるのに対して、「-単一事象」自動詞はテイル形を取ってもプロセス副詞と共起できないことなどから、「-単一事象」自動詞はプロセス局面を欠いていることを示し、これらが、第八章の解釈と合致することを示す。

第九章では全体をまとめるとともに今後の課題を示す。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、現代日本語の他動詞文と自動詞文を詳細に分析し、従来の様々な見解を再整理して、自動詞文・他動詞文の全体の枠組みを提示した点に価値がある。

動詞の自他は文法研究の中心課題の一つであり、これまでに多くの研究がなされ、理論の上でも現象の面でも、さまざまな仮説や指摘が示されてきたが、日本語の動詞文について、十分説得力のある形で枠組みを示すには至っていなかった。

本論文は、現代日本語の自動詞文と他動詞文について、事象構造から、事象が単一であるか否か、事象が単純であるか否かといった点に注目して再整理を試みるとともに、「意志性」や「働きかけ性」、「変化性」といった素性を用いた分析によって、現代日本語で用いられる他動詞文と自動詞文のほぼ

全体をカバーする枠組みを構築している。

特に、第四章から第五章にかけて、これまで例外的だと見なされてきた介在性の他動詞文や状態変化主体の他動詞文、「夜を明かす」など時間経過を表す文などに注目して、一般的な他動詞文との異同を詳細に論じた上で、包括的に処理する枠組みを提示している。これは、単に、日本語に見られる他動詞文の例外として扱えばよいという従来の立場を脱し、他言語との自他の対照研究にも有効な枠組みを提案するものであり、この論文が日本語研究にとどまらず、一般言語学的な視座を持つことを示している。

こうした視座は、本居春庭、奥津敬一郎、影山太郎、早津恵美子、天野みどり、佐藤琢三、田川拓海など、日本語の自他研究ばかりでなく、Croft や Goldberg, Baker, Levin & Rappaport など、内外・新旧の数多くの先行研究を詳細かつ批判的に検討している点にも顕著である。本論文では、さらにもう一つ、コーパスを用いた調査を積極的に行い、理論と現象の相互連関を図るという姿勢が見られる。実態調査を積極的に行うことで、従来等閑視されてきた現象を見つけ出し、その検討を通してさらに枠組みの妥当性を高めることに成功している。「夜を明かす」型他動詞文や「木が植わっている」型自動詞文などは、理論面でも注目され、本論文がきっかけとなり、次の研究が大いに進展すると思われる。

本論文にも不十分な点はいくつか見られる。枠組み構築のために、さまざまな仮説を提示するが、調査したコーパスの限界もあり、例証が不十分で、推論を重ねただけの説明にとどまる部分も見られる。また、「夜を明かす」型や「木が植わっている」型についても、本論文内でさらに深く論究することもできたと思われる。ただ、前者は、検証が行き届かない部分が見られるというに過ぎず、枠組み全体の評価には関わらず、後者についても、本論文が明らかにした事柄によってさらに導かれる類いの課題であって、これらの存在は、いささかも本論文の価値を損なうものではない。

2 最終試験

平成 25 年 5 月 23 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。